

家園

第 34 号 (訪中特集)



字体作者：周 慧琚

特定非営利活動法人
中国帰国者・日中友好の会
〒110-0016 東京都台東区台東 3-35-7
ペガサスミシンビル 1 階



58

ハルビン空港で出迎えを受ける(2025 年 9 月 10 日)

目 次

★ 特集・「報恩の旅」写真.....	2
★ 黒竜江外国語学院での挨拶 By 池田澄江	3
★ ハルビン訪問記 By 安原幸彦	4
★ 訪中記 By 米倉洋子	5
★ 「感恩訪中」報告	6
★ 戦後 80 年、見つからないふるさと	7
★ 本会活動記録・お知らせ・編集後記	8

活動写真(「報恩の旅」特集)

(撮影: 吉岡孝行)



黒竜江外国語学院の公演後



朗読劇「孤児の涙」



舞踏劇「中国媽媽」



詩・歌「我有兩個家」



ハーモニニー演奏



ハルピンの中央ストリート



伏爾佳莊園にて

黒竜江外国語学院での公演前のあいさつ

NPO 法人中国帰国者・日中友好の会 理事長 池田澄江

今天，我怀着无比喜悦和激动的心情站在这里，与黑龙江外国语学院师生相聚一堂，进行友好交流。

首先，请允许我代表中国归国者・日中友好之会，并以我个人的名义，向贵学院向我们提供宝贵的演出场地表示衷心的感谢！

能够来到黑龙江外国语学院，感受以外语教学促进黑龙江高水平开放的交流氛围，与充满青春色彩和无限活力的师生们进行交流，我们友好访华团一行 90 多人深感荣幸，也借此机会向专程莅临观看演出的各位表达我们的感激和崇高的敬意！

今年时值中国抗日战争胜利暨世界反法西斯战争胜利 80 周年，中国举行了各种纪念活动，我也参加了中国驻日本大使馆举行的相关友好活动，我们还在大使馆进行了反战、报恩的友好演出。当前，日本社会围绕历史认知出现了复杂的变化，一些变化也是我们不愿意看到的。因为我们这些耄耋老人的人生经历非常特殊，我们的血脉源自日本，而我们的成长却深深扎根于中国的土地，受恩于中国人民无私的养育之情。中国是我们的第二故乡，在这里有我们无法割舍的青春记忆和养育之恩。这种特殊的人生轨迹，让我们对中日两国都怀有极其深厚而复杂的感情，也让我们比任何人都更加深刻地理解和平的珍贵与友好的分量。我们也希望通过演出告诉各位，那场侵略战争不仅加害了亚洲各国人民，也对本国民众造成了伤害。

我们 NPO 法人中国帰国前遗留在中国并被中国人成。成立该会的主旨正是人生历史，感恩中国人民们的微薄之力，促进两国虽然说历史的包袱不应由记，发动战争的反思必须来。真正的友好，建立在述我们的故事，通过开展民众深化理解、增加好感，特别是年轻一代，通过交流正确的历史认知，能够真正以史为鉴，超越历史，面向未来。



者・日中友好之会，主要由日本战败民抚养长大的日本孤儿及其家属组为了铭记这段被日本军国主义翻弄的博大胸怀与善良，并致力于通过我民间的相互理解和世代友好。

后代来承担，但历史的教训必须被铭真诚，这样才能确保和平和友好的未真诚的理解和信任之上，希望通过讲各种民间文化交流活动，让更多两国

久闻黑龙江外国语学院是黑龙江省内唯一一所语言类普通本科高校，也是《黑龙江省高等教育强省建设规划》重点建设高校之一。俗话说百闻不如一见，在彩排时看到学院拥有丰富的教学和生活设施，图书馆、实验中心、体育场馆等鳞次栉比，到处可见学生们欢快的身影。尤其是听说贵学院开办英语、商务英语、俄语、日语、韩语等重点或特色语言专业，并与多国高校及机构建立了合作关系，开展丰富多彩的国际交流与合作项目。欣闻贵学院以“经世致用，学贯中西”为校训，致力于培养具有国际视野和实践能力的高素质人才。我相信黑龙江外国语学院不仅是培养语言人才的摇篮，更是传播知识、传递友好的殿堂。我更相信，通过今天的演出，我们不仅能透过历史贯穿现代，让军国主义造成的历史悲剧不再重演。同时通过在贵学院的交流，能播种下友谊的种子。因为外语能够连接世界，跨越国界，打破隔阂，看清彼此，增强亲切感和好感度。

我知道，在座的同学们中很多会成为未来的外交家、翻译家、语言和文化的使者，希望你们发挥你们的才华、运用语言、沟通世界，成为促进中日语言等文化交流的“文化鸟”和“美丽纽带”，奏响中日健康稳定发展的新华章。

最后，再次感谢黑龙江外国语学院对我们本次演出的大力支持和周到安排。祝愿贵院事业蒸蒸日上，发展不断创辉煌！

祝愿各位领导、师生、各界朋友工作顺利、学业有成、健康快乐！

也衷心祝愿中日两国人民的友谊，如同美丽的松花江水，绵延流长，永不褪色！

ハルピン訪問記

弁護士 安原 幸彦

9月10日から14日まで、残留孤児や2世の皆さんとハルピンを訪問しました。16年前の2009年にも訪問したのですが、その様変わりには驚きました。その時にはなかった40階建、50階建のビルが何本も建っていたからです。街中も本当に賑やかでした。

今回のメインは「孤児の涙」の公演でした。何度見ても胸にグッと来る演劇です。台詞が中国語でわからない私にもその場面が何かはわかります。全てを理解していないかも知れませんが、孤児の皆さんが旧満州の地で経験した地獄のような日々をよく表現していると思いました。

黒竜江省社会科学院の皆さんと交流も印象的でした。残留孤児の皆さんが経験したことに強い関心を持っていることにいささか驚きました。私も発言の機会があったので、孤児の皆さんが経験した3つの遺棄（終戦時の遺棄、戦後の遺棄、帰国後の遺棄）を紹介し、帰国後の遺棄と闘ってきた経緯をお話ししました。

孤児の皆さんとは別に、米倉先生・張さん・大久保真紀記者と731部隊の跡を見学しました。少し意外だったのは、731部隊の残虐性・非人道性をもっと展示しているかと思ったのですが、私たちが書籍で読んできたものより控えめな感じがしました。しかし、遺された建物などの遺跡は旧日本軍の残虐さを思い起こさせるものでした。一度は見ておくべきものですね。

9月10日至14日，我随同中国残留孤儿及其家属们等重访了哈尔滨。距离上次2009年的访问已过去16年，这座城市的巨变令人惊叹——当年不见踪影的40层、50层摩天大楼如今已林立街头，整座城市焕发着蓬勃生机。

此行重头戏是观赏话剧《孤儿泪》。这部作品每次观看都直击心灵，即便我不懂中文台词，每个场景传递的情感都清晰可感。虽然不能完全理解所有细节，但剧中生动再现了孤儿们伪满洲经历的那段地狱般的岁月。

与黑龙江省社科院的交流令人印象深刻。学者们对残留孤儿遭遇的深切关注出乎我的意料。在发言环节，我特别阐述了孤儿们经历的三重抛弃（战败时、战后以及归国后的抛弃），并分享了他们归国后为摆脱歧视而抗争的历程。

在米仓先生、NPO的小张和大久保真纪记者陪同下，我们还参观了731部队遗址。略显意外的是，展出的物品对部队残暴性的揭露比我们通过文献了解的相对克制。但那些保存完好的建筑遗迹，依然无声诉说着旧日本军的反人类罪行。这个承载着沉重历史记忆的场所，确实值得世人亲眼见证。

731罪证陈列馆的结束语是：“别回头，向前走，出口有光，有人间烟火，有国泰民安；别忘记，来时路，有民族苦难，有国恨家仇”。

参观者在面对那么残忍的历史真相时，会产生种种复杂的心情。所以结束时提醒大家要铭记历史、珍惜和平。也告诉人们在回顾过去的苦难时，要勇敢地向前看，同时不忘历史的教训，努力维护国家的繁荣和民族的尊严。

731部隊罪証展示館の結びの言葉はこう記している、「振り返らず、前へ進もう。出口の外には光があり、人々の安全な暮らしがあり、安泰の国家がある。けれど忘れてはならない、ここまでの道程を。そこには民族の苦難があり、憎しみがあつたのだ」。

この結びの言葉は、歴史の真実に向き合う訪問者の複雑な心情を考え、歴史を銘記し平和を大切にするメッセージを伝えている。過去の苦難を顧みるばかりしないで、勇気を持って前を見据えながらも歴史の教訓を忘れず、国の繁栄と民族の尊厳を守る努力を続けるよう人々に呼びかけている



戦後 80 年、残留孤児のみなさんとハルビンを訪問して

弁護士 米倉洋子

戦後 80 年。一番若い残留孤児も 80 歳になる今年、「訪中団を組んで大勢で中国に行くのはこれが最後」との思いで、NPO の皆さんは去年から訪中を企画されていましたが、熱心にお誘いいただき、弁護士からは安原先生と私、また残留孤児の恩人である河合弘之先生と、3 人の弁護士がご一緒しました。9 月 10 日～14 日、残留孤児、2 世、配偶者など総勢 90 名の大旅行でした。

9 月のハルビンは、例年はかなり寒くなるそうですが、今年は晴天が続き、半袖で過ごせるほど気温も高く、私たちを歓迎してくれているようでした。

残留孤児のみなさんは、11 日と 12 日、「孤児の涙」と「中国ママ」の劇を熱演し、中国の聴衆の方々から大きな拍手をうけていました。

黒竜江省社会科学院の方々とも、3 夜連続で会食し、交流しましたが、みなさん残留孤児の歴史や日本での活動のこともよくご存知で、大歓迎して下さいました。

思えば、裁判が解決して 2 年後の 2009 年にも、「養父母謝恩の旅」として訪中団を組んで訪中し、温家宝首相から「みなさんは日中友好の架け橋」との言葉をかけていただきましたが、あれから 16 年、残留孤児のみなさんは本当に心をこめて日中友好ための活動を積み重ねてきました。その積み重ねが、今回のあたたかい歓迎につながったのでしょうか。

公式行事とは別に、安原先生、NPO 職員の張さん、朝日新聞記者の大久保真紀さんと 4 人で、日本軍が細菌兵器の開発のため中国の人々に残虐な生体実験を行った 731 部隊の「罪証陳列館」を見学してきました。これほど残酷なことが行われた地に取り残された残留孤児の苦勞と、育ててくれた養父母の愛情の大きさを、改めて思いました。

孤児のみなさんの日中友好への強い思いを、私たちは若い日本の世代に伝えていく責任があると思います。

それにしても、80 歳を過ぎた孤児のみなさんの若々しいこと！見習わなくては、と思うことしきりでした。みなさん、いつまでもお元気で！

战后 80 年，最年轻的残留孤儿也已 80 岁。怀着“最后一次组建访中团前往中国”的想法，NPO 的各位从去年开始策划访中事宜。在各位的热情邀请下，我们律师团的安原先生和我，以及残留孤儿的恩人河合弘之先生，共三位律师一同前往。9 月 10 日至 14 日，共有残留孤儿、第二代、配偶者等 90 人参加了这次大旅行。

9 月的哈尔滨，往年已经相当寒冷，但今年晴空万里，气温也相当高，仿佛在欢迎我们。残留孤儿的大家在 11 日和 12 日，热演了《孤儿的泪》和《中国妈妈》两部剧，赢得了中国观众的热烈掌声。我们还与黑龙江省社会科学院的各位进行了连续三晚的会餐交流，大家对残留孤儿的历史和在日本的活动非常了解，给予了我们热烈的欢迎。

回想起来，2009 年，也就是诉讼解决两年后，我们曾以“养父母感恩之旅”的名义访中，温家宝总理曾对我们说“你们是中日友好的桥梁”。从那时起，残留孤儿的大家一直真心实意地为中日友好活动贡献力量。正是这些积累，才有了这次的热烈欢迎。

除了正式活动外，我们还参观了日本军队在中国人民身上进行残酷人体实验的 731 部队“罪证陈列馆”。在这里，我们再次感受到了残留孤儿的艰辛和养育他们的养父母的深情厚意。

我们有责任将孤儿们对中日友好的坚定信念传递给年轻一代的日本人。尽管已经 80 多岁，但孤儿们的年轻活力令人钦佩。希望大家永远健康！



聖ソフィア大聖堂にて

感恩訪中報告

编辑委员：孙妮

2025 年是中国人民抗日战争胜利 80 周年暨世界反法西斯战争胜利 80 周年。

80 年前，因那场侵略战争被遗弃在中国的日本孤儿最小的也 80 岁了。是经历了 14 年战乱的中国养父母收养了他们，像对自己的孩子一样疼爱他们，节衣缩食养大他们，这份恩情孤儿们一刻也不曾忘记。他们身在日本，难忘中国的家。时隔 6 年 NPO 日中友好之会再次组织耄耋之年的孤儿们返乡报恩，这已是孤儿们第五次感恩访华了。大家非常兴奋，报名之踊跃超出了预期。有孤儿和他们的配偶、孤儿的二世、还有日本人。他们知道自己 80 多岁了，以后团体访华的机会不多了，非常珍惜这难得的机会。

此次访问的两场演出至关重要，从 3 月开始，在池田澄江理事长的领导下、由崔树人老师导演，演员们进入紧张的排练状态。有我们的保留节目《中国妈妈》、《孤儿泪》，还有由张兢新创作的诗朗诵《爹，娘我们回来看你了》。今年的夏天是真热啊！大家顶着烈日一场一场地排练，一个细节一个细节的揣摩。池田理事长亲自上阵，崔老师严格把关，北野老师带着她的团队放下其他工作，认真参加排练，给我们的演员队伍增加了新鲜血液、栗山老师和唐雪媛老师亲自控制音响效果…

一切准备就绪，9 月 10 日一行 88 人的感恩访华团浩浩荡荡地出发了。随团访问的有一直支持和支援我们的河合律师、安原律师、米倉律师，朝日新闻的记者大久保真纪随团采访。感恩团中有孤儿 20 人，他们中最大的 86 岁了，还有 13 位日本人。社会各界也很重视我们的这次访华活动，在成田机场孤儿们接受了媒体的采访。回顾了在中国的那些难忘的岁月，让更多的人了解那段历史，赞颂中国人民的伟大。

在哈尔滨太平国际机场，中日友好人士举着《欢迎回家》的横幅，那种回家了的感觉让人热泪盈眶。团员们被记者围着又接受了中国媒体的采访。这不是一次普通的旅行，是日中友好的促进之旅。

9 月 11 日、12 日分别在外语学院和哈尔滨评剧院演出了我们精心排练的节目。池田会长满怀深情地表达了对中国养父母的感恩和对中国故乡的眷恋。

两场演出的效果惊人的好！《中国妈妈》、《孤儿泪》、《爹、娘我们回来看你了》《我有两个家》，以及日本演员武村惠理演唱的《松花江上》。一声声呼唤：妈妈——，群情激奋，台上演员们声泪俱下，台下观众也泪流满面。这是对战争的控诉、这是对养父母的感恩、这是对日中友好的呼唤、这是对下一代的传承。一位青年学生在接受日本媒体采访时说：“我真的不知道有残留孤儿这一群体。战争太残酷了！中国人真伟大，会养育敌人的孩子。”一个日本人把节目记录下来，接下来连续两天回放观看，问他：“你看懂了吗？”他说：“看懂了，还流泪了，真了不起！”

总之，半年多的精心准备收获颇多，达到了预期的宣传效果。这次访问取得圆满成功，首先要感谢中国驻日本大使馆、作为我们的后援，为我们排除了种种阻力和困难。同时也要感谢黑龙江省社会科学院，特别是笪志刚所长，以及哈尔滨日本遗孤养父母联谊会的胡晓慧会长、为我们的访问，为落实两场演出的会场东奔西跑，功不可没。为期五天的感恩之旅结束了，大家意犹未尽。期待着下次，我们重返故里，继续为日中友好、为世界和平贡献力量。再见故乡！再见亲人！再见我魂牵梦绕的地方！



哈爾濱駅

戦後 80 年、まだ見つからない「ふるさと」

河村 忠志

80 年。それは、私の人生のほとんどを覆う長い年月だ。

1945 年、日本は敗戦を迎えた。その時、私はまだ幼く、記憶はなかった。両親と離ればなれになり、私は中国東北の地に残された。

養父母に実子のように大事に育てられた私は、当たり前で中国語を話し、中国の習慣を身に着けた。でも、自分が日本人であることを知ってから、時折、見たことのない祖国に想を馳せていた。自分が「日本人」だという自覚が日に増していた、心のどこかで「帰るふるさと」は祖国の日本だ、と思い始めた。

戦後数十年も経ってから、「残留孤児」という言葉が広まり、私たちのような存在が注目されるようになった。日本政府の調査が始まり、血縁を探す人々が現れた。私も何度か手がかりを探したが、結局、両親の消息はわからなかった。それでも祖国に憧れ、帰国した。

80 年が過ぎ、今、私は家族に囲まれ、静かな暮らしを送っている。

帰国して 20 年、気づいた。日本は私にとって「ふるさと」だろうか？ 答えは出ない。失ったと思ったことがあったが、一度も擁したことがないかもしれない。戦争が奪ったものは、単なる時間や土地ではなく、わたしにとっては「帰るふるさと」そのものだった。

今、戦後 80 年を迎え、私は思う。戦争の傷は、世代を超えて残る。私のような残留孤児だけでなく、家族を失った人、故郷を追われた人——みんな、それぞれの物語を抱えている。80 年経っても、癒えない傷がある。

もし、戦争のない世界を願うなら、まずは過去を見つめ、記憶を受け継ぐことから始めなければならない。私の人生は、戦争が生んだ悲劇の一片にすぎない。でも、私の小さな声が、二度と同じ過ちを繰り返さないための糧になれば——それだけが、私にとってはせめてもの救いだ。

八十年。这漫长的岁月几乎要覆盖了我的一生。

1945 年，日本战败。那时我还年幼，没有记忆。与父母失散后，留在中国东北的黑土地上。

养父母视我如己出，我自然而然地学会汉语，学会遵循中国的习俗。但自从知晓自己日本人的身份后，偶尔会遥想未曾谋面的祖国。当“日本人”的自觉日益强烈时，心底某处开始认定：该归去的故乡应是日本。

战后数十年，“战争遗孤”开始被大家知晓，我们这样的存在终被关注。日本政府启动调查，出现了寻亲的人们。我也几度追寻线索，最终却未能知晓父母下落。即便如此仍向往祖国，选择了归日。

八十年过去，如今我儿孙绕膝，过着宁静的生活。

归国二十载，蓦然惊觉：日本真是我的“故乡”吗？我找不到答案。曾经我以为只是一时失去，但现在应该说从来就不曾拥有。战争夺走的不仅是时光与土地，对我而言更是“可归之乡”本身。

值此战后八十年，我深切体会到：战争伤痕会跨越世代。不仅是像我这样的遗孤，还有失去家人的人、被迫离乡的人——

每个受害者都背负着自己的故事。纵使八十年流逝，仍有无法愈合的伤口。

若期盼没有战火的世界，首先必须正视过去，传承记忆。我的人生

不过是战争悲剧

的一个碎屑。但若我发出的微弱声音能成为避免重蹈覆辙的基石里的一颗沙粒——于我便是最大的救赎。



東北の暮らし光景

認定 NPO 法人中国帰国者・日中友好の会活動（R7 年 7 月～R7 年 11 月）

R7 年 5 月 日	元東京最高裁裁判官・中国残留孤児国家賠償訴訟弁護団団長鈴木経夫がご逝去、5 月 6 日に行われた告別式には、本会から池田等 5 人参列
R7 年 6 月 25 日	中華人民共和国駐日本国大使館主催の「戦後 80 周年記念集会」に本会から 30 人出席
R7 年 7 月 25 日	厚労大臣と面談、池田など 5 人と安原弁護士、米倉弁護士が参加
R7 年 8 月 26 日	元駐中国大使阿南惟茂記念シンポジウムに、池田と張が出席
R7 年 9 月 7 日	「チャイナフェスティバル 2025」に舞踊教室・楽器教室・音楽教室がメインステージで出演、成功を収めた
R7 年 9 月 10～14 日	「感恩の旅」と名付けられた訪中団がハルビンを訪問
R7 年 10 月 22 日	一般社団法人 日中協会の成立 50 周年レセプションに本会池田、他 2 名が参加
R7 年 11 月 6 日	本会の協力で竹内亮が製作したドキュメンタリー映画「名なしの子」の試写会が中国大使館にて行われ、本会から 20 人出席

※お知らせ※

★2026 年新年会開
時間:2026 年 2 月 23 日
場所:王子 北とぴあ

★お正月休み
時間:2025 年 12 月 27 日
～2026 年 1 月 4 日

会報のバック・ナンバー
一お読みになれます♪



《家園》編集委員（第 34 号）

白 山 明 徳	河 村 忠 志
二 田 口 国 博	張 狄
祖父江安紀子	孫 妮
写真撮影	吉岡孝行
レイアウト	松本莉恵 張狄

編 集 後 記

終戦から 80 年。生きている証人とされている残留孤児も段々といなくなる。

習近平中国国家主席は、以前の抗日戦争勝利記念日に「日本が侵略戦争を起し、中国人民に災難をもたらしたのは、日本軍国主義がやったことであり、中国政府と人民は未だかつてあの戦争の責任を日本人民に帰したことはない」と語って、当時の日本政府と日本人民を区別しました。中国国民の大多数もそのような考えを持っています。だから「残留孤児」という特殊な集団がいる、そして方正県で「日本人公墓」が建てられた。

でも逆の立場だったら、公墓は立てられたでしょうか、そして何人の「孤児」が生き延びられるか、考えさせられます。

よろず相談窓口

TEL : 03-3835-9357 平日 10:00～16:00 日本語・中国語対応
FAX : 03-3835-9358 随時可